新中期事業方針に合わせてスポーツチャレンジ賞をリニューアル。新たなコンセプトを掲げ、受賞者のチャレンジを支援する受賞記念事業を設け、シンポジウム「女性アスリートの健康を考える」を開催（実施は2023年度）

2022/2023 令和4年度

サッカーW杯で日本代表がドイツ、スペインに勝利し、また米大リーグで大谷翔平がベーブ・ルース以来の「2桁勝利・2桁本塁打」を達成するなど、日本のスポーツやスポーツ選手が世界から注目を集める年となった。コロナ禍で延期・中止等が続いたYMFSの各種活動も、安全対策を施しながら徐々に対面プログラムを再開した。

新中期事業方針に沿って、スポーツチャレンジ賞を刷新。新たに記念事業も実施。

スポーツ界の“縁の下の力持ち”の功績を称え、受賞者の献身的な取り組みを紹介することで、広く、深く、挑戦する心の尊さを社会に浸透させていきたい――。そう願って2008年から実施している表彰制度「ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞」。第14回の2021年（令和3年）度までに、功労賞、奨励賞合わせて26件の個人・団体を表彰してきた。

一方、当財団は5か年の新中期事業方針「Value 5」をスタート。既存事業の質の向上を目的に掲げ、スポーツチャレンジ賞についてもコンセプトの見直しを行った。こうした中で、よりYMFSらしさが際立つ表彰制度としてさらに発展させていこうと、功労賞と奨励賞を一本化した新たな基準で第15回の候補者推薦の公募を開始した。

リニューアルしたスポーツチャレンジ賞で、その最初の受賞者に決定したのは、産婦人科医の能瀬さやか氏だった。能瀬氏は、健康リスクを抱えやすい女性アスリートに関しスポーツ現場の危機的な現状を明らかにするとともに、誤った認識を改善するため、医界・スポーツ界と連携した啓発活動を進めている。女性アスリートの現在・未来の健康を守るその情熱的な取り組みに、選考委員会は満場一致で能瀬氏を選出した。

この年から、スポーツチャレンジ賞は、チャレンジ支援事業の枠組みに移行。受賞者のチャレンジを支援するアクションを事業として組み入れ、受賞記念事業としてシンポジウム「女性アスリートの健康を考える」を開催（実施は2023年度）。元トップアスリートや現場指導者をパネリストに迎え、課題の改善に向けた議論を行うとともに、女性スポーツ医学の知見を女性全体のヘルスケアに結びつけていく取り組みを検討した。

チャレンジ支援事業

新型コロナの5類感染症への移行を見据えて、安全対策を行いながら4年ぶりに対面形式で「YMFSスポーツ・チャレンジャーズ・ミーティング」を開催。異分野交流会などを実施することで、「つながりの価値」を実感しながら、笑顔あふれる相互刺激発揚の場となった。

■ 2022年度（第16期生）助成概要

	申請数	採択件数	助成金額
体験助成	53件	12件	1,215 万円
研究助成	53件	17件	1,665 万円
計	106件	29件	2,880 万円

■ 第15回ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞

能瀬 さやか 氏
女性アスリートの「現在・未来の健康」を守る
ゼロからのチャレンジ

スポーツ体験促進 事業

■ ジュニアヨットスクール葉山

新年度は24名のスクール生でスタート。安全対策を施しながら、すべてのスクール活動を再開。教室やレスキューボートなど施設・設備の拡充も行った。

■ セーリング・チャレンジカップIN浜名湖

4年ぶりの開催となった第31回大会は、OP初級、OP上級、ILCA4級、ILCA6級、420級の5クラスを開催。全国から集まった70名（66艇）が参加した。

■ 全国児童 水辺の風景画コンテスト

全国から16,930点の作品応募があり、入賞23作品（入選306作品）を決定。入賞作品は当財団ホームページや「ジャパンインターナショナルボートショー2023」の会場にて展示・公開した。

■ スポーツ教材の提供

全国663校・団体から申請を受け、抽選会を経て120校・団体にボッチャボールセット、タグラグビーセットを提供した。

■ ユニバーサルスポーツ体験会

静岡県内の小中学校11校で「チャレンジ★ユニスポ」を開催し、児童・生徒、教員合わせて719人が参加した。

■ 調査研究

障害者スポーツ選手のキャリア調査、テレビメディアによる障害者スポーツ情報発信環境調査、パラリンピアンに対する社会的認知度調査、テレビコマーシャルによる障害者スポーツ情報発信環境調査、ユニ★スポ体験での児童の意識変容調査を実施。調査報告書を発行したほか、記者説明会を実施した。